

井上和章

“ながら力” が歩行を決める 自立歩行能力を見きわめる臨床評価指標「F & S」

沖田一彦
(県立広島大学教授・理学療法学)

脳卒中患者の歩行を、見守りから自立にいつ移行していいかという判断に悩んだことのない理学療法士(PT)はいないだろう。これまでに判断の基準がなかったわけではない。しかしその多くは、患者の運動機能レベル(麻痺側での片脚立位保持が5秒以上可能など)を指標とした、経験あるいは後ろ向き研究の結果に基づくものであった。本書の画期的な点は、それらの指標の不十分さに気づき、新たな指標を綿密な研究に基づいて開発したことにある。

その内容の本質はタイトルに表れている。「ながら力」が歩行を決める」とはどういうことか。それは、運動機能の評価に認知機能の評価を合わせて行うことの重要性を意味している。前者には、PTにはなじみ深い Functional Balance Scale(FBS)の下位4項目が用いられる。そして後者には、エピソード記憶の想起を求める簡単な質問を歩きながら行う Stop Walking When Talking(SWWT)が採用されている。SWWTは、歩行中の質問により患者が歩みを止めるかどうかをみる簡単な二重課題である。両者の結果を合わせて判断

することから、この指標はおおの頭文字を取って「F & S」と名付けられた。

この評価は、PTであれば誰もが簡便かつ費用をかけずに実施できる。「こんなことで本当に科学的な判断ができるのか?」といぶかるPTもいるだろう。しかし本書を最後まで読めば、そんな疑念は払拭されるはずだ。「F & S」は、PTへのアンケート結果から浮き上がった問題を出発点とし、多変量解析を用いた後ろ向き研究での高い信頼度から開発された。さらに多施設間での前向き研究の結果からその妥当性が示されている。それは、数年にわたる一連の研究の集大成であり、現段階では十分に科学的なものと言える。

本書の画期的な点をさらに2つ挙げておきたい。1つは、われわれの業界において「歩行の自立判定基準」のように、臨床的に重要であるにもかかわらず領域としてはピンポイント的な内容がまとまった書籍として出版されることが少ない点である。もう1つは、著者は(本人の言葉を借りれば)「バリバリの研究者」ではなく、長く病院に勤務するPTであり、本書が「臨床でのモヤモヤ感」を解消するために書かれた点である。

臨床現場でこの問題に悩むPTには必読の書であり、院内外の勉強会等でぜひ活用して欲しい。

●A5版・140頁

定価 2,100円(2,000円+税)

2011年11月 協同医書出版社・刊